

ビブリオエッセー

産経新聞 令和2年(2020年)9月28日(月)

大阪市此花区 一瀬友那 (19)

【記憶屋】

織守かみきよつや(角川ホラー文庫)

2020.9.28

一本の映画がきっかけだった。「山田涼介、主演映画決定!」。今年初めに公開されて見に行ったが、最初に原作を知ったのは、映画になる前のこの宣伝文だった。自分が好きな人気アイドルの映画だから見る前に読んでおこうと、ただそれだけの興味だった。

おかげで映画と原作の比較もできたが、「ホラー」とあったのが今から思えば不思議だ。人の記憶をめぐり、じっくり考えさせる内容だったからだ。

大学生の遠一は飲み会で先輩の杏子と知り合った。思いを告げ、OKをもらうまでに時間はかからなかったが、幸せの絶頂にいたある日、杏子と連絡がとれなくなる。数日後、杏子を見つけ声をかけると「あの」「誰……ですか?」。遠一のことを一切憶えていなかった。

記憶屋。記憶を消す怪人。この都市伝説を知った遠一は杏子が記憶を失った原因を探ることになる。遠一の周囲では親しい人たちが記憶をなくしていた。映画のセリフだが印象に残ったひとことがある。山田涼介の演じた遠一が杏子に言った「必ず俺が記憶を取り戻す」。

もし私の大切な人が私の記憶だけを忘れてしまったら、その人のために何ができるだろう。逆にもし、私の中にある大切な人の記憶がなくなるすれほどのような記憶なのだろう。

弁護士の高原の言葉も忘れられない。「記憶で生かされる人間もいれば、その逆もいる。自分に関する記憶が、誰かを支えるものとして残るなら、それは幸せなことだ……」

なにげなく一緒にいる家族、友人らの大切さをこの本を通して考えさせられた。楽しかった記憶、つらかった記憶、いろいろな記憶とともに人は生きていく。この本を読んだ方に聞いてみたい。「一番大切な記憶は何ですか」。

あのときの私とあなたに…

※無断転載不可